

# 朝飯

島崎藤村

青空文庫



五月が来た。測候所の技手などをして居るものは誰しも同じ思  
であらうが、殊に自分はこの五月を堪えがたく思う。其日々々の  
勤務——つとめ——気圧を調べるとか、風力を計るとか、雲形を観察すると  
か、または東京の气象台へ宛てて報告を作るとか、そんな仕事に  
追われて、月日を送るといふ境涯でも、あの蛙が旅情をそそるよ  
うに鳴出す頃になると、妙に寂しい思想かんがえを起す。旅だ——五月  
が自分に教えるのである。

いろいろなことを憶出すのもこの月だ。

ある日のことであつた。丁度自分の休暇に当つたので、事務の  
引続を当番の同僚に頼むつもりで書いて置いた気圧の表を念の為

に読んで見た。天気、晴。気温、上昇。雲形、層、層積、卷積けんそう、  
卷積。よし。それで自分は小高い山の上にある長野の測候所を出  
た。善光寺から七八町向うの質屋の壁は白く日をうけた。庭の内  
も今は草木の盛な時で、柱に倚よりか凭かつて眺めると、新緑の香に圧  
されるような心地がする。熱い空気に蒸される林檎の可憐らしい  
花、その周囲を飛ぶ蜜蜂の楽しい羽音、すべて、見るもの聞くも  
のは回おもいで想でのなかだちであつたのである。其時自分は目を細くし  
て幾度となく若葉の臭を嗅いで、寂しいとも心細いとも名のつけ  
ようのない——まあ病人のように弱い気分になつた。半生の間の  
歡うれしいや哀しいが胸の中に浮んで来た。あの長い漂泊くろしみの苦痛を  
考えると、よく自分のようなものが斯うして今日まで生きながら

えて来たと思われる位。破船——というより外に自分の生涯を譬える言葉は見当らない。それがこの山の上の港へ漂い着いて、世離れた測候所の技手をして、雲の形を眺めて暮す身になるうなどは、実に自分ながら思いもよらない変遷うつりかわりなのである。

こう思い耽つて居ると、誰か表の方で呼ぶような声がする。何の気なしに自分は出て見た。

旅たび窶やつれのした書生体の男が自分の前に立つた。片隅へ身を寄せて、上りがまち框のところへ手をつき乍ら、何か低い声で物を言出した時は、自分は直にその男の用事を看みて取った。聞いて見ると越後の方から出て来たもので、都にある親戚をたよりに尋ねて行くという。はるばるの長旅、ここまでは辿り着いたが、途中で煩わづらつ

た為に限りある路銀を費い尽して了った。道は遠し懐中ふところには一文も無し、足は斯の通り脚気で腫れて歩行も自由には出来かねる。情があらば助力して呉れ。頼む。斯う眞実を顔にあらわして嘆願するのであつた。

「実は——まだ朝飯も食べませんような次第で。」

と、その男は附加つけたして言つた。

この「朝飯も食べません」が自分の心を動かした。顔をあげて拝むような目付をしたその男の有様は、と見ると、体軀からだの割に頭おとがの大きな、下顎おとがの円く長い、何となく人の好きそうな人物。日に焼けて、茶色になつて、汗のすこし流れた其痛々いたいたし敷い額の上には、たしかに落魄やきがねという烙印やきがね印が押しあててあつた。悲しい追お

憶もいでの情は、其時、自分の胸を突いて湧き上つて来た。自分も矢

張その男と同じように、饑つかれと疲労とで慄えたことを思出した。目あ的とどもなく彷徨さまよい歩いたことを思出した。恥を忘れて人の家の門に立つた時は、思わず涙が頬をつたつて流れたことを思出した。

「まあ君、そこへ腰掛けたまえ。」

と、自分は馴なれなれし々敷い調子で言つた。男は自分の思惑を憚るかして、妙な顔して、ただもう悄しよんぼり然と震え乍ら立つて居る。

「何しろ其は御困りでしよう。」と自分は言葉をつづけた。「僕の家では、君、斯ういう規則にして居る。何かしら為て来ない人には、決して物を上げないということにして居る。だつて君、左様じゃないか。僕だつて働かずには生きて居られないじゃないか。

その汗を流して手に入れたものを、ただで他に<sup>ひと</sup>上げるといふことは出来ない。貰う方の人から言つても、ただ物を貰うといふ法はなからう。」

こう言い乍ら、自分は十錢銀貨一つ取出して、それを男の前に置いて、

「僕の家ばかりじゃない、何処の家へ行つても左様だろうと思うんだ。ただ呉れると言われて快く出すものは無い。是から君が東京迄も行こうというのに、そんな<sup>やりかた</sup>方法で旅が出来るものか。だからさ、それを僕が君に忠告してやる。何か<sup>し</sup>為て、働いて、それから頼むという気を起したらば<sup>どう</sup>奈何かね。」

「はい。」と、男は額に手を宛てた。

「こんなことを言ったら、妙な人だと君は思うかも知れないが——」と自分は学生生活もしたらしい男の手を眺めて、「僕も君等の時代には、随分困ったことがある——そりやあもう、辛い目に出遇ったことがある。丁度君が今日の境遇を僕も通り越して来たものさ。さもなければ、君、誰がこんな忠告なぞするものか、實際君の苦しい有様を見ると、僕は大に同情を寄せる。まあ僕は哭なきたいような気が起る。真ほんとう実に苦しんで見たものでなければ、苦しんで居る人の心こころもち地は解らないからね。そこだ。もし君が僕の言うことを聞く気があるなら、一つ働いて通る量見になりたまえ。何か君は出来ることがあるだろう——まあ、歌を唄うとか、御経あを唱げるとか、または尺八を吹くとかサ。」

「どうも是という芸は御座いませんが、尺八ならすこしひねくつたことも——」と、男は寂しそうに笑い乍ら答えた。

「むむ、尺八が吹けるね。それ見給え、そういう芸があるなら売るのが可いじやないか。売るべし。売るべし。無くてさえ売ろうという今の世の中に、有つても隠して持つてるなんて、そんな君のよくな人があるものか。では斯うするさ——僕が今、君に尺八を買うだけの金を上げるから粗末な竹でも何でもいい、一本手に入れて、それを吹いて、それから旅をする、ということにしたまえ——兔に角これだけあつたら譲つて呉れるだろう——それ十錢上げる。」

斯う言つて、そこに出した銀貨を男の手に握らせた。

「人の一生というものは、君、どうなるか解らない。」と自分は男の顔を熟視みまもり乍ら言った。「これから将来さき、君がどんな出世をするかも知れない。僕がまた今日の君のように困らないとも限らない。まあ、君、左様そうじゃないか。もし君が壮大おおきな邸宅やしきでも構えろという時代に、僕が困って行くようなことがあつたら、其時は君、宜敷頼みますぜ。」

「へへへへへ。」と男は苦笑にがわらいをした。

「いいかね。僕の言ったことを君は守らんければ不可いかんよ。尺八を買わないうちに食つて了つては不可いかんよ。」

「はい食たべません、食たべません——決して、食たべません。」

と、男は言葉に力を入れて、堅く堅く誓うように答えた。

やがて男は元氣づいて出て行つた。施ほどこし与こしということは妙なもので、施ほどこされた人も幸しあわせ福ふくではあるうが、施した当人の方は尚更心嬉しい。自分は饑えた人を捉つかまえて、説法を聞かせたとも気付かなかつた。十錢呉れてやつた上に、助言もしてやつた。まあ、二つ恵んでやつた。と考えて、自分のしたことを二倍にして喜んだ。五月——寂しい旅情は僅かに斯ういうことで慰められたのである。しばらくして、水汲みから帰つて来た下女に聞くと、その男は自分の家を出ると直に一膳めしの看板をかけた飲食店へ入つたという。其時自分は男の言葉を思出して、「まだ朝飯も食べません。」と、繰返して笑つた。定めし男の方でも自分の言葉を思出して「説法は有難いが、朝飯の方が尚有難い。」とかなんとかひとり独

語<sup>ごと</sup>を言い乍ら、其日の糧<sup>かて</sup>にありついたことであろう。

(一九〇六年一月「芸苑」)



# 青空文庫情報

底本：「日本プロレタリア文学大系（序）」三一書房

1955（昭和30）年3月31日初版発行

1961（昭和36）年6月20日第2刷

初出：「芸苑」

1906（明治39）年1月

入力：Nana ohbe

校正：林 幸雄

2001年12月17日公開

2012年9月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 朝飯

島崎藤村

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>